

# 刊行にあたって

---

歯科保健・歯科医療を取り巻く環境は大きな変革を迎えている。平成21年7月に「歯科保健と食育の在り方に関する検討会報告書」で、歯科保健分野からの食育の推進についての提言がなされ、さらに平成23年8月には、歯科口腔保健に関する施策を総合的に推進することを理念とした「歯科口腔保健の推進に関する法律」が制定されるなど、歯および口腔の健康の重要性の認知度が高まり、必然的に歯科医師が果たす役割への期待も膨らんでいる。この歯科への期待に応えるためには、多職種での連携は不可欠であるが、なかなか最初の一步を踏み出しにくい現状があるようである。歯科へのニーズがあるのは間違いないが、そのニーズが歯科へ伝わりにくいのも一因かもしれない。

平成24年4月の診療報酬改定で、「周術期の口腔機能管理」が新設された。がんなどの手術後肺炎などの合併症を歯科での口腔機能管理で「予防」しようという画期的なもので、医科からの依頼を起点とする。新たに訪問歯科診療に取り組むとなれば、治療器材の準備や診療体制の変更など、それなりの負担があるだろうが、「周術期」では診療情報をもった患者が自院に来院するのが基本パターンであるので、新たに準備しなければならないものはない。「周術期」によって合併症の予防に貢献できれば、患者とその治療にかかわる歯科以外の職種からの信頼も厚くなると思われる。それを契機として、医科と歯科とのパイプが徐々に太くなれば、「周術期」だけでなく、さまざまな潜在的ニーズの存在も伝わりやすくなるはずである。今後、訪問歯科診療を拡大していかなければならないが、訪問で対応できることには限界があるのは自明であり、それを見越した対応を患者が通院可能な時期から心がけていれば、結果として訪問での負担も軽くなり、取り組みやすくなると思われる。

表題にある「オーラルマネジメント」とは、その構成要素として、狭義の口腔ケアとしての「口腔清掃 (Cleaning)」、廃用予防や嚥下訓練などを意識した「リハビリ (Rehabilitation) [機能評価などのアセスメントを含む]」（口腔清掃と合わせて、広義の口腔ケア）、患者・家族や歯科以外の職種への「教育(Education)」、口腔や嚥下の総合評価としての「アセスメント(Assessment)」、「歯科治療 (Treatment)」を包含するものである。これらによって「口腔環境の整備」を図り、ゴールとしての「食べる (Eat)」もしくは「楽しむ (Enjoy)」を目指すというもので、頭文字を並べると“CREATE”になる。今後の新たな方向性を示すキーワードの1つとしてご理解いただければ幸いである。

この“CREATE”を意識し、歯科医療従事者が行う診療所や訪問の場でのより安全・確実なオーラルマネジメント、高齢者の疾患の特徴などを正しく理解したうえで行われる疾患・病態別のオーラルマネジメントに焦点を絞り、オーラルマネジメントによる口腔機能の維持・改善・向上や医療連携の実際について、それぞれの専門家に執筆を依頼した。さらに、歯科以外の職種から歯科に期待されているオーラルマネジメントのあり方についてもご紹介いただいた。

本書が特に開業されている歯科医師にとって、新たな診療スタイルの導入のきっかけとなれば幸いである。

2012年10月  
編集委員代表 岸本裕充